



「ふるさと研究活動」は、子どもからおとなまで、幅広い世代の市民のみなさんの参加により、ふるさと所沢の自然・歴史・芸術・文化・産業など、様々な分野の資料や情報を集め、調査・研究を深めてゆく活動です。「所沢のことをなんでも知りたい！」方のご参加をお待ちしております。

7月22日

星と所沢のものがたり
体験学習会

部分日食を見よう!



短いチャンスを逃さないよう、場所を屋上から玄関前に変更しての観察でした

ら、参加者の皆さんからの「見えたよ!」「太陽なのに月みたい!」という大歓声が印象的でした。

次は、8月26日の18時から20時にかけて、生涯学習推進センターのグラウンドで、星を観測する「七夕に星を見よう」を計画しています。7月7日は現在の暦では梅雨の最中ですが、昔の暦だとほぼひと月遅れて晴れる可能性が高くなります。また、昔の暦では月の満ち欠けで日を数えるため、「7日」の月は月齢6（新月は月齢0）前後で必ず夜半前に沈みます。国立天文台では、このような条件による観測に適した日を「伝統的七夕の日」と定め、夜空を見上げるきっかけとして広めています。

今年の「伝統的七夕の日」は8月26日です。上記のイベントには定員を設けていますので、参加については下記までお問い合わせ下さい。

7月22日、46年ぶりとなる皆既日食に日本中が沸きました。当センターの体験学習会「部分日食を見よう!」も、募集人数をはるかに超えるお申し込みをいただき、多数の方にお断りをせざるを得なかったことをお詫びします。

ところが当日は朝からあいにくの空模様。10時の開始時刻前には、参加者の皆さんも傘をさしての集合で、一時はどうなることかと思いましたが、食の最大間近となった11時頃、薄い雲を通して、話のとおり欠けた太陽を観察することができました。ほんの10分足らずの天文ショーながら



てるてる坊主を作りました

8月にご覧いただける展示など

内容	場所
企画展示室 「星と所沢のものがたり」	3階中央棟手前
常設展示室 所沢の歴史・昔の暮らし・自然など 年表できました!	3階中央棟奥
メモリアルルーム 並木東小学校の「記憶」	3階中央棟中央
新所沢地区の移り変わり part1～「移り変わり」ミニ写真展	南棟3階階段脇の掲示スペース
今月の航空写真 所沢駅付近～平成9年・平成3年・昭和60年	3階中央棟廊下壁



ふるさと研究自然だより

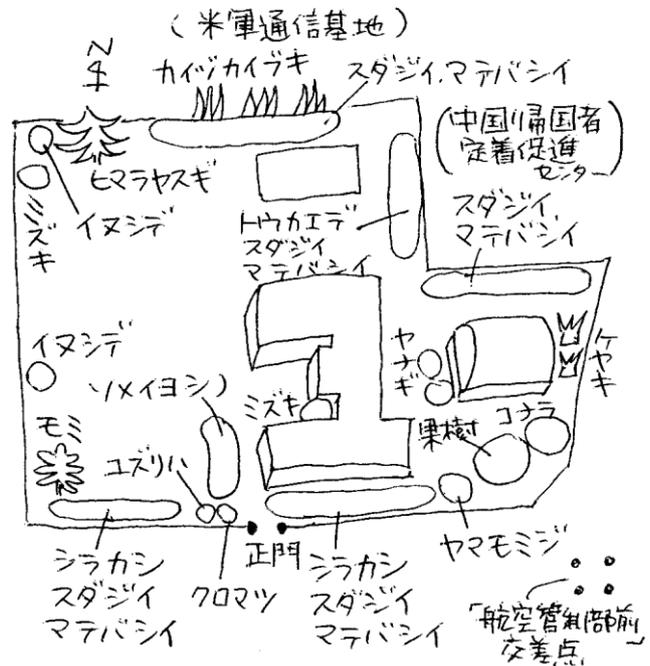


その1 センター庭の樹木

当センター敷地には、約120本の樹木が育っています。大部分は、旧並木東小学校開校の昭和59年（1984年）に植えられたものです。このたび、市民グループの^{もくろくかい}木楽会のご協力で、樹木の種類を調べ、木の幹に種名を表示していただきました。

敷地の南と北の縁では、シラカシ、マテバシイ、スダジイが繰り返し植えられ、北側ではカイズカイブキも多数。南の正門の横にクロマツとユズリハ。正門から奥に進む左手にはサクラ（ソメイヨシノ）が8本並び、春は華やか。玄関右手に大きなミズキが1本。敷地東南の「航空管制部前」交差点の角には、アンズ、ザクロ、カキ、クリなどの果樹や、キンモクセイ、ヤマモミジ、コナラなどがまとまっています。

西南の角（中央中との境）にはモミ、西北の角にはヒマラヤスギ、イヌシデ、ミズキ。他にケヤキ、トウカエデ、ヤナギ、イチョウ、ビワ、サルスベリ、ドウダンツツジ、ジンチョウゲなどが点在しています。敷地には草花もあり、野鳥や昆虫も生息しています。



19才の少年飛行兵の死

ふるさと研究市民トピック vol. 2



8月15日は終戦記念日です。所沢市域においても、昭和6年～20年までに戦争で亡くなった人は1,311名にのぼりました。集計データから出征した人の約3割が戦死し、その平均年齢は26.8才の青年でした。（『ところざわ歴史物語』121頁）

ご承知のとおり、現在も各地で戦没者に対する慰霊がさまざまなかたちでおこなわれているわけですが、最近になって、九州の大分県中津市で所沢出身の少年飛行兵の慰霊がおこなわれているということがわかりました。

その少年飛行兵は、当時三ヶ島村（現所沢市三ヶ島地区）出身の粕谷欣三という、弱冠19才の若者です。彼は終戦の年の昭和20年5

月5日、現在の^{大分県}竹田市上空で米軍のB-29戦略爆撃機と激突して戦死しました。粕谷欣三は大村海軍航空隊所属の海軍一等飛行兵曹で、当時「紫電改」という戦闘機に搭乗していたということです。

調べてみると、粕谷欣三は現在の所沢市林の出身であることがわかりました。中津市では慰霊碑が立てられ今も献花が絶えないといえます。若くして戦死した少年飛行兵の記憶を忘れてはいけないといことが、地元の方や関係者のなかにあったのでしょうか。

こうした一つ一つの記憶や記録を大切に、後世に伝えていく必要があるのではないかと改めて思います。